三重大学教育学部研究紀要　第73巻　社会科学（2022）83－101頁

ロシア中央軍事博物館にみる軍事博物館の国民統合機能について

――軍事博物館の政治的機能に関する考察のための覚書――

馬原潤二

Über die Funktionen der nationalen Integration des militärlischen Museums in Europa
Fall des Zentralmuseums der russischen Streitkräfte

MAHARA　Junji

要旨

本稿は、現代ヨーロッパの軍事博物館の政治機能の一事例としてロシア中央軍事博物館の国民統合機能のあり方について考察するものである。広大な国土と多くの民族を抱えるユーラシア国家ロシアは、ソヴィエト崩壊後よき「ラシャーニン」（ロシア国民）を育成するために戦争の共通の記憶、すなわち大祖国戦争の記憶を組織化することによって各人のあいだに愛国心を育成し国民として統合しようとしている。

ソヴィエト連邦時代から続くモスクワのロシア連邦中央軍事博物館は、そのような政治的課題に対応するべく大祖国戦争を中心とする展示を展開し、ファシスト国家ドイツという「人類の敵」に対する正義の戦いを遂行した赤軍とソヴィエト人民という二項対立的なシェーマのもと、人々を「われわれ」として一体化させる「物語」を構成している。そこには、虚実織り交ぜたナショナル・ヒストリーのもとに国民統合をはかる「古い軍事史」の考え方が忠実に反映されていることから、この国では軍事博物館が今もって公定ナショナリズムを表現する場として機能していることが読み取れよう。

ロシアのプーチン政権は近年、大祖国戦争の記憶を「聖別」し軍と軍人の存在意義を無批判に強調するイデオロギー的施策を矢継ぎ早に打ち出してその権威主義的な性格をさらに露骨に示すようになっているが、それもこれも戦争の記憶もとに国民統合せざるをえないロシア特有の事情によるもので、問題はその適切な表現の仕方にあるようにおもわれる。ロシア中央軍事博物館も展示は、そうしたロシアの今後の政治的課題についても示唆するものになっているのである。

キーワード：軍事博物館、国民統合、ロシア連邦、ロシア中央軍事博物館

I

本稿は現代ヨーロッパ軍事博物館の国民機能について考察するための準備作業として、まずはヨーロッパの最西部に位置する共和政国家ロシア、正式名称ロシア連邦 Российская Федерация の事例について検討しようとするものである。

もっとも、ロシアはヨーロッパに収まりきる国家ではない。東ヨーロッパ平原からウラル山脈を越えてシベリアからオホーツクに至るまで、その版図はヨーロッパのはるか遠く極東アジアにまで達している。東は太平洋、西は北ヨーロッパ平野にバルト海、南は中央アジアに黒海、北は北極海をそれぞれ望み、ヨーロッパばかりでなくアジアをも股にかけるその姿は、まさしくユーラシア国家と呼ぶにふさわしい。国土面積にして一七一〇万キロ平方メートルというばかりではピンとこないかもしれないが、この数字がほぼ南米大陸（一七七八万キロ平方メートル）と同値であり、わが国の国土（三七万キロ平方メートル）のおよそ四五倍、

世界の陸地面積（一四七二四万キロ平方メートル）の実に八分の一にあたるといえば、その広大さのほども知れようというものであろう。最西端のカリーニングラードから最東端のアナディリのあいだにあるタイムゾーンは一一、国内にはなんと一〇時間ものの時差が存在している。文字どおり「破格」な国家である。

ロシア国家のユーラシア的性格は、そこに住まう人々の多様性にもあらわれている。目下、ロシアは世界最大の国土に一億四六一七万人もの人口（二〇二一年一月現在）を擁しており、その民族構成もきわめてヴァリエーションに富んでいる。ロシア人を主とする東スラヴ人をはじめ、テュルク系のタタール人、インド・イラン系のオセット人、ツングース系のエヴェンキ人、ユダヤ人、そしてごく少数ながらアイヌ人などなどその数実に一八二、これほど多くの民族を抱える国家は、アメリカのような移民国家を除けば、他にはちょっとみられない。また、全国共通の公用語はロシア語であるが、地域によって公用語として扱われている言葉は二八あり、実際に使用されている言語となるとその数は実際にはもっと多い。宗教をみても、キリスト教やイスラームから、ユダヤ教、仏教、さらにはテングリのようなシャーマニズムに至るまで、人類の知る信仰形態の多くがあたかもここに集結しているかのごとき観すらある。

ロシア国家のもつかかるユーラシア的性格は、この国の成り立ちに由来している。キエフ・ルーシ Киевская Русь に端を発し、モスクワ大公国 Московское великое княжество、ロマノフ家によるロシア帝国 Российская империя、さらにはソヴィエト社会主義共和国連邦 Союз Советских Социалистических Республик に至るまで、この国は拡張に次ぐ拡張をかさねてきた。ドニエプル川中流域のいわゆる「ルーシの地 Русьская земля」にはじまり、ヴォルガ川周辺領域のテュルク系のイスラーム王朝の征服（一六世紀中葉）、コサックによる西シベリアの蹂躙（一六世紀後半）、アラスカ領有によるアメリカ大陸への進出（一八世紀末、アラスカはのちにアメリカに買収）、第二次世界大戦によるバルト三国やベッサラビアにカレリアの併呑（二〇世紀中葉）と、ロシアの発展とは、ほとんどこの果てしなき領土拡大と同義であった。東スラヴ系のロシア人を中心とする国家は、この過程で、広大な版図をわがものとし、人種も信仰も異にする数多くの民族を内包する「帝国」の様相を呈するようになっていったのである。一九九一年のソヴィエト連邦解体後、連邦を構成する一五の共和国の独立によって、およそ五三〇万キロ平方メートルもの国土と一億四千万余の人口を喪失したが、周辺地域を圧する「帝国」然としたその存在感は今なお健在であるといってよい。この国には、単に地域大国というには収まりきらないスケールがある。ロシアとは、そういう国なのだ。

となると、ここで問題となるのは国民統合のあり方である。二二の共和国、四六の州、九つの地方、三つの特別市、一つの自治州、四つの自治管区という八五もの「連邦構成主体 Субъект федерации」からなる現代ロシアは、セオリーどおりの国民国家を形成するにはあまりに大きすぎる。実際には全体の人口の八割近くを占めるロシア人主導の国家であるとはいえ、そのエスニックな多様性の幅のあまりの大きさゆえ、人々をひとつの国民へとまとめ上げる材料に極端に乏しいといわざるをえないのである。人種も、生活習慣も、言語も、宗教も大いに異なる複数の民族がどうしてひとつの国家のもとに団結するのでなければならないのかという問いに正面から応答するのは、決して容易なことではない。

その点、かつてのロシアには、教会と君主という目に見える「鎹」がいた。国教たるロシア正教を説く正教会と「全ロシアのインペラートルにして専制君主 Император и Самодержец Всероссийский」たるロシア皇帝がまさにそれである。皇帝ニコライ一世の教育大臣であり古典学者でもあったセルゲイ・ウヴァーロフによる官製民族主義の三原則「正教・専制・民族性 Православие, Самодержавие, Народность」に掲げられたように、八端十字架（宗教）と双頭の鷲（君主）の存在こそが多民族国家ロシアを一体化する紐帯とみなされていたのである。帝政時代のロシアはこうして「正教」と「専制」という二つの「鎹」をナショナル・アイデンティティの中核とし、非ロシア人を一方的にロシア化し画一化する大ロシア主義的な「民族性」のもとに国民統合をはかろうとしていたのである。

一九一七年のロシア革命はこのような封建的で前近代的な政治システムそのものを徹底的に拒絶し破壊したうえで、国民統合のあり方を文字どおり一新するきっかけとなった。一九二二年に成立したソヴィエト連邦は、民族主義にもとづく集合的アイデンティティ形成を「民族の牢獄」（レーニン）として否定し、労働者階級の団結という社会主義イデオロギーにもとづく一体化をはかろうとしたのである。そのため、ソ連は民族自決の原則のもと、各民族の前衛たる労働者たち（共産党）が自発的に集まって建国したという建前をとっていた。もっとも、建前はあくまで建前であって、一国社会主義（スターリン）のもと、帝政時代以上に苛烈な民族主義的な画一化政策を旨とする「収容所群島」（ソルジェニーツィン）と化していたというのがその実態であったが、それでもこの国には雑多な人々をひとつにまとめあげるだけのロジックが存在していたのである。

現代のロシア国家たるロシア連邦はそのソヴィエト連邦が崩壊（一九九一年）した後に登場した国家である。そこには帝政時代の「鎔」もなければ、ソ連時代のロジックも残されていない。ロマノフ家のツァーリは今や完全に過去の遺物になった。他方で信仰心が人々をまとめあげるには、この国はもはや取り返しのつかないほど世俗化してしまった。そして、現行ロシア連邦憲法（第一三条）によってイデオロギー国家の復活を固く禁止せねばならないほど、マルクス・レーニン主義はあまりに多くの人々の心証を害しすぎてしまった。これを要するに、現在のロシアはすべてを失ってしまっているのである。歴史上この国のナショナル・アイデンティティの中核をなしてきたモメントがことごとく無効を宣告されるに至っている以上、ロシア連邦がその発足当初から国民統合のあり方をめぐってさまざまな論争を経験せねばならなかったのも当然といえば当然であった。

ロシア連邦の初代大統領ボリス・エリツィンはロシアを民主主義国家として再出発させ、民主主義という「人類普遍の価値」を国民統合の原理として活用としたが、ことは思惑どおりには運ばなかった。急激な民主化と資本主義化による社会の混乱は、むしろ、民主主義に対するアレルギーを高揚させてしまい、エリツィンのいだいた期待とはまったく正反対の結果を生じてしまったのである。他方、この民主化に対するアレルギーから台頭した「ユーラシア主義 евразийство」の考え方にしても、今の今までロシア社会全体の支持をえられているとはみなしがたい。ヨーロッパでもアジアでもないユーラシアに属するロシアの地政学的特異性を高唱するこの主張は、アレクサンドル・ドゥーギンのような理論家を擁しつつも、一九九〇年代後半の一時的なブームののちには世論を喚起するほどの力をもちえずに失速してしまった。その他にも、極端なものから穏当なものまで、この時期以降ありとあらゆる「主義」が唱えられたが、そのいずれもがロシア国民を力強く団結させるほどの力を発揮しえないでいる。思想の力は、この国をまとめ上げるには至っていないのである。

かといって、帝政時代やソ連時代のようにロシア人の民族意識に訴えかけることは、一部の知識人によって熱心に称揚されているとはいえ、今や現実的な選択肢とは決してみなしがたい。そのようなことをすれば、非ロシア系諸民族の反発を買い、国家解体というかつてのソヴィエト連邦と同じ轍を踏むことになりかねないからだ。といっても、それ以前にロシア連邦の足元は揺らいでいる。ソ連邦崩壊後ロシア国家は少数民族のナショナリズムの標的となり、実際、カフカス地方のチェチェン共和国の独立要求は二度にわたる武力衝突（チェチェン紛争、一九九四 - 九六年（第一次）、一九九九－二〇〇九年（第二次））にまで発展した。また、独立までは求めないものの、一方的に主権を宣言（一九九二年）して連邦からの大幅な権限の委譲を要求したタタールスタン共和国のような事例も生じている。そのような「遠心力」を封じ込めるためにも、ロシア国家は数多くの非ロシア的なものを包含したナショナル・アイデンティティの確立、すなわち人々を「ルースキー」русский（ロシア民族）としてではなく「ラシャーニン」Рашанин（ロシア国民）としてアイデンティファイする必要につねに迫られている。この「ユーラシア国家」にあっては、国民統合のための

「求心力」を確保することが、国家存続のための切実な政治課題になっているのである。

二〇〇〇年にエリツィンの後継として大統領に就任したウラジーミル・プーチンが直面したのはまさしくこのような課題であった。折からの原油価格の高騰による国力の回復を背景に、プーチンはロシアの大国 Власть としての地位を強調して人々の大国意識を呼び覚ますとともに、各人の愛国心 патриотизм を鼓舞することによってこの課題に対処しようとした。そして、そのために「超大国」ソヴィエト連邦を再評価し、過去の栄光の想起をとおして国民の誇りを取り戻すことによって、ナショナル・アイデンティティの確保というアポリアに対応してみせようとしていたのである。そこで焦点となったのが戦史、なかんずくナチス・ドイツを打ち破ってソ連邦が「超大国」の地位を手にするきっかけとなった第二次世界大戦であった。祖国防衛のための団結という過去の経験は、特定の民族主義的ナショナリズムに訴えかけることなく多民族国家に住まう人々をもれなく一体化させるには非常に都合がよい。わけても、この国でソ連時代から大祖国戦争 Великая Отечественная война と呼ばれてきた第二次世界大戦こそは、甚大なる損害を被りつつナチズムという巨悪を滅ぼして全人類に貢献した輝かしいアンチ・ファシズムの「正戦」ではないか。ロシア国民を自尊心とともにアイデンティファイするには、これ以上にない最適の材料だったのである。

このような考え方のもと、今日のロシアでは、愛国心という言葉にまとわりついていた負のイメージは一掃され、愛国心は人々が持つべきモラルにほかならないものとする風潮が意識的に組織されつつある。赤の広場における対独戦勝記念パレードの恒例化（二〇〇〇年以降）、ソヴィエト連邦国歌のメロディーのロシア連邦国歌（歌詞は旧ソ連国歌の作詞者セルゲイ・ミハイルコフが新たに作詞）としての復活（二〇〇一年）、赤旗のロシア陸軍旗としての再指定（二〇〇一年）、第二次世界大戦戦没者追悼のためのゲオルギー・リボン着用運動の開始（二〇〇五年）、さらには大量の愛国番組や愛国映画の提供するためのロシア国防省直轄のテレビ局ズヴェズダ Звезда の開設（二〇〇八年）、世界中で大祖国戦争に参加した祖先の写真を掲げて行進する「不滅の連隊 Бессмертный полк」パレードの開始（二〇一二年）、スターリングラードの呼称の限定的復活（二〇一三年）など、現代ロシアを「超大国」ソ連邦と重ね合わせる施策を次々と繰り出すことで、プーチン政権は大国意識を伴う愛国心を徐々にではあるが確実に市民生活へと浸透させようとしている。のみならず、二〇〇一年に策定した愛国心教育のための国家プログラムにもとづき、学校教育に加えて社会教育の場においても愛国心の涵養を義務付け、内外の批判をものともせず、愛国心を「ラシャーニン」たる国家公民の健全な人格形成のための柱とする方向性を打ち出すまでになっている。わたしたちが考察対象にしている軍事博物館もまた、ここロシアにあっては、かかる公定ナショナリズム形成の国家的プロジェクトの文脈において取り扱われるべき施設であり、愛国心教育を促進するためのものとみなされているのである。

では、その姿はどのような様相を呈しているのであろうか。以下、その事例として、モスクワにあるロシア連邦中央軍事博物館 Центральный Музей Вооруженных сил Российской Федерации についてみていくことにしよう。

II

ロシア連邦中央軍事博物館はロシア連邦の首都モスクワの北東区に位置し、大作家フョードル・ドストエフスキーの生まれたマリインスキー貧民救済病院宿舎のほど近くにある。はす向かいには世界最大級の劇場であるロシア陸軍劇場 Театр Российской Армии（かつてのソヴィエト赤軍中央劇場）がその威容を誇り、背後にはエカテリーナ庭園 Екатерининский сад が広がっている。ロシア第一の都市にありながらも中心部からは距離があることもあって、博物館周辺は一見どことなくのんびりしている。とはいえ、博物館の前を

通っているのがソ連軍通りであること、さらに博物館周辺にアフガンスタン従軍将兵の記念像、遭難した原子力潜水艦クルスク乗組員の慰霊碑、赤軍創設時の指導者ミハイル・フルンゼの像など、軍事関連のモニュメントがひしめいていることがわかれば、目の前の雰囲気はだいぶ変わってみえる。とにかく軍事的なものだらけなのだ。

もっとも、そうした雰囲気は、この街では実はありふれた光景だ。ここモスクワでは、軍事・戦争関連のモニュメントがやたらと目につく。公園や広場はむろんのこと、教会、地下道、鉄道や地下鉄の駅構内、さらにはちょっとした裏路地に至るまで、さまざまなレリーフやモニュメントが林立している。軍事博物館と呼ばれる施設のうちロシア国防省管轄のものにかぎってみても、中央軍事博物館のほか、装甲車両中央研究所所属の中央装甲兵器技術博物館 Центральный музей бронетанкового вооружения и техники（通称・クビンカ戦車博物館）、モニノ空軍基地内にあるロシア連邦空軍中央博物館 Центральный музей Военно-воздушных сил РФ、ヴラシハにある戦略ミサイル軍博物館 Музей Ракетных войск стратегического назначения および防空軍博物館 Музей Войск противовоздушной обороны、かわったところでは二〇一九年に設立された軍服歴史博物館 Музей истории военной формы одежды、さらには戦勝記念公園 Парк Победы 内に設けられた大祖国戦争中央博物館 Центральный музей Великой Отечественной войны など、まさしく枚挙にいとまがない。ほかにも、小規模のもの、私営のものなどなど、それこそこの種の博物館は掃いて捨てるほど散在している。モスクワはとかく軍事・戦争の「匂い」のする街だ。

それもこれも、都市としてのモスクワがたどってきた軌跡をふりかえってみるならば、なるほどと頷けないこともない。一部の政治家が好んで口にするように、モスクワのみならずそもそもロシアという国は、歴史上つねに「包囲された要塞」（ホルブーリン）だったのであり、この街も度重なる戦乱抜きには語りえない過去を背負っているのである。実際、その名前が文献にはじめて登場した一二世紀以降、モスクワはモンゴル帝国に蹂躙され（一二三八年）、クリミア・ハン国に焼き払われ（一五七一年）、ポーランド・リトアニア共和国の入城を許し（一六一〇年）、フランス皇帝ナポレオン一世に占領され（一八一二年）、ナチス・ドイツ軍には目と鼻の先まで迫られている（一九四一年）。そして、ソ連邦崩壊後の EU（ヨーロッパ連合）と NATO（北大西洋条約機構）の東方拡大の加え、旧ソ連構成国で相次いだ「カラー革命」（二〇〇三年のバラ革命（ジョージア）、二〇〇五年のオレンジ革命（ウクライナ）とチューリップ革命（キルギス））と呼ばれる民主化要求運動もまた、少なからぬロシア人のあいだでは、モスクワ（ロシア政府）を包囲せんとするアメリカおよび西ヨーロッパの策謀と解されていることが多い。いずれにせよ、モスクワという街は、今日に至るまでつねに包囲されているというある種の被害者意識と異教徒や異民族に対する徹底抗戦を高唱する自己意識とがないまぜになった特有の雰囲気のもとにある。モスクワの軍事的モメントのおびただしさとは、そうした歴史的な背景とロシア国民の軍事に対する関心の高さあってのことなのである。

話を戻そう。ロシア連邦中央軍事博物館はそのような背景のもと、この街ではもっとも早い時期に登場した軍事博物館である。設立は一九一九年、ウラジーミル・レーニン率いるボルシェヴィキ（ソヴィエト連邦共産党の前進）の権力奪取のきっかけとなった十月革命二周年を記念して「赤軍と海軍の生活」を展示する場として整備されたのがはじまりで、当初は赤軍海軍博物館 Музей Красных Армии и Флота と称していた。その後、一九四七年にソヴィエト連邦中央軍事博物館 Центральный музей Вооруженных Сил СССР と改称され、ソ連崩壊後の一九九三年に現在の名称に再度変更されている。ヨーロッパの他の国々の軍事博物館に比べるとこの博物館の設立年次はそれほど古いとはいえないが、その成り立ちからも、単なる武器展示――近代ヨーロッパの黎明期の軍事博物館は、たいていの場合、退役あるいは鹵獲した武器を展示することが主な目的とされていた――以上の目的があったであろうことは容易に想像がつこう。革命という一大政治イヴェントの記念日にあわせて設置され、しかも、赤軍という武力蜂起の推進力をテーマとしていたことから

もわかるように、この博物館の主眼は発足当初からイデオロギー的な国民教化にむけられていたのである。

その痕跡は、ソヴィエト連邦時代の一九六五年に建てられたこの博物館の容貌のうちに容易に読み取ることができる。ソ連共産党の党大会を催行した旧クレムリン大会宮殿（現クレムリン宮殿・一九六一年竣工）をおもわせるガラス張りの直線的なファサードが印象的な博物館棟は、その側面外壁に現在も社会主義モダニズムにもとづく兵士の巨大なレリーフを擁しつつその威容を保っている。また、エントランスホール正面には二階へと上がる大階段が設けられているが、階段が左右に分岐する踊り場の中央には長い白石柱に支えられたレーニンの巨大な頭像が周囲を睥睨するかのように屹立している。加えて、エントランスホール二階の側壁は労働者と兵士の団結と勝利を表現するこれまた社会主義リアリズムの絵画によって埋め尽くされており、ここが社会主義の世界観を表現するための場になっていることは一目瞭然だ。そうしたプロパガンダはもちろん今では過去のものでしかないものの、とにかくそのイデオロギー臭が今なお鼻につくことは請け合いである。外壁を見、ホールに立ち入るだけで、見学者はこの博物館が目指すところを理解できるようになっているのである。

さて、その結構であるが、地上二階地下一階建てのこの博物館は、内部の敷地面積がおよそ五千平方メートル、地上部分に二四の展示室を有し、地下部分はショップおよびカフェテリアになっている。さらに建物の裏手には野外展示もあり、陸海空軍および戦略ミサイル軍の装甲兵器や鹵獲した他国の兵器などの軍装備品およそ一六〇点が展示されている（のみならず、他のヨーロッパの国々の軍事博物館と同様、軍の研究機関でもあるため軍事科学図書館 военно-научной библиотеке を併設しており、こちらも一般にも広く開放されている）。なお、所蔵している品目はその数約七万点、そのうち常設の展示品がだいたい一万五千点というから、この手の博物館にしてはかなり大きい部類に入るといっていいだろう。常設展示は、一六世紀のモスクワ大公国から現在のロシア連邦に至る歴代ロシア国家の戦史を主たるテーマとしている。展示は時代ごとに、①モスクワ大公国からロシア帝国まで（一～三展示室）、②ロシア革命およびロシア内戦（四～五展示室）、③ソヴィエト連邦成立と赤軍の発展（六～八展示室）、④大祖国戦争（九～一八展示室）、⑤冷戦期のソヴィエト連邦（一九～二一展示室）、⑥ロシア連邦（二二～二三展示室）と、大きく六つのカテゴリーに分類されており（二四展示室は不定期の企画展用のスペース）、各階の展示は反時計回りに配されている。

ここからわかることは、この博物館の展示がやはり大祖国戦争すなわち第二次世界大戦に大きなウェイトを置いていることだろう。一六世紀から二〇世紀初頭に至る四〇〇年近くのロシアの歴史の展示が三つの展示室でこと足れりとされているのに対して、一九三九年から一九四五年まで六年間続いた戦争の説明にあたっては、二四の展示室のうち実に一〇室があてがわれているのである。展示室の割合でいえば全展示室の四割強ということになるが、大祖国戦争については、二階正面の大ホールをはじめ広い展示室が優先的に配分されていることから、実際にはこの博物館の展示のなんと七割近くのスペースが割かれているのだということになる。こうしたあからさまな配置からしても、この博物館の関心が主として大祖国戦争に集中していることは明らかであるといってよい。それによって、ロシア国家の歴史の焦点がまさにこの戦争にこそあるということをまざまざと示してみせているのである。

実際、この博物館のそのような意図は、展示の内容にも明確にあらわれている。ロシア革命や大祖国戦争の前後で陳列展示のレイアウトの仕方や説明内容がかなり大きな変化をみせているのである。このことを念頭に置きつつ、まずは最初のカテゴリーである第一次世界大戦までの歴史展示をみてみよう。

この展示室の展示から受ける最初の印象は、端的にいうとするならば、ただただわかりにくいの一語に尽きる。実はここにかぎった話ではないのだが、ことロシアという国の博物館と称される施設は見学者に対して親切とはお世辞にもいいがたい場合が多い。まず、展示室全体のコンセプトや内容を概説するパネルのようなものが見当たらない。陳列についても、展示品が展示ケースばかりでなく床や天井にところ狭しと並べ

られているのはいいとして、どこか雑然としていて焦点をしぼりにくい。また、個々の展示品に付せられているキャプション（説明文）にしても、たとえば、マスケット銃の場合だと名称と産地と作成年代が書かれているばかりだったりして、展示品の性質はおろか展示のコンセプトもよくわからない。しかも、数少ない情報源たるキャプションも、英語表記はなくロシア語表記のみときている。とにかくこれでは、その道の玄人やマニアと呼ばれる好事家はともかく、素人には何が何だかよくわからないというほかない。ましてや、われわれのような外国人にとっては、ロシア語の話者はともかくとして、正直いってお手上げである。

ここ中央軍事博物館の展示もまた、ご多分にもれずそうした「ロシア的」な雰囲気を色濃く反映している。そして、第一次世界大戦に至る最初のカテゴリーの展示では、とりわけその観が強いといわざるをえない。ここでは、モスクワ大公国を引き継いだロシア帝国の歴代皇帝の治世（第一展示室）、一九世紀以降のロシア陸海軍の戦争（第二展示室）、第一次世界大戦（第三展示室）というテーマのもと、制服や拳銃のような軍用品、戦地の写真、戦線図、あるいは鹵獲した軍旗といった断片的な資料などが展示の中心をなしているが、その説明は実にあっさりしている。なかには、デカブリストの乱（一八二五年）に参加したチェルニゴフ竜騎兵連隊の連隊旗竿頭のようなここでしかみられないものや、世界で最初に実用化された自動小銃であるフェドロフ M1916 のようなたいへん有名なものがあるものの、キャプションからはその価値が読み取れるほどの情報がえられないため、それと気づかずに見逃される可能性が非常に高い。

そうした個々の展示物についてもさることながら、ここでは展示をもとにひとつの物語として歴史を構成しようとする取り組みもほとんどみられないといってよい。たとえば、ロシアが手痛い敗北を喫した日露戦争（一九〇五－〇六年）の展示にしても、説明らしい説明は戦地や司令官の写真や軍装など個々の展示品のキャプションにとどまっていて、戦闘の推移を全般的に説明する状況図（地形図と軍隊符号を用いて戦況を説明するもの）らしきものすら存在しない。帝政ロシアのターニングポイントとなったクリミア戦争（一八五三－五六年）の展示にはさすがに状況図が張り出されているが、それも展示ケースの下段に控えめに配置されていて、十分な説明になっているとはみなしがたい。そして、日露戦争にせよクリミア戦争にせよ、戦争の全体像や戦闘のなりゆきはおろか、戦争全般に関する説明もなければ、敗因分析にかかわるナレーティヴな説明もまたどこにもみられないのである。周知のとおり、日露戦争とクリミア戦争はそれぞれ第一次ロシア革命（一九〇六年）とアレクサンドル二世の農奴解放令（一八六一年）を誘発するロシア史上の重要なポイントとなったが、この点についての言及も一切ない。まさか負け戦だからというわけでもあるまいが、国民教化を目的とする博物館でありながら、こうした戦史の影響をふれずに済ませてしまうというのは、いささか不自然の観があるというのでなければならないだろう。

ところが、展示がロシア革命とソヴィエト連邦の成立をめぐる第二・第三のカテゴリーにさしかかると、様相は少しずつ変化しはじめる。もともと社会主義イデオロギーのプロパガンダのための場だったこともあって、ロシア革命が関係してくると、その展示の充実ぶりと饒舌さが途端に際立ちはじめるのである。

ちなみに、ロシア革命勃発とその後の混乱をテーマとする第四展示室の入り口左手には、革命をなしとげたレーニンをはじめとするオールド・ボルシェヴィキらの集合絵画（スターリンもいればレフ・トロツキーもいる！）が壁一面に描かれており、これだけでも雰囲気の違いは明らかだ。とはいえ、ボルシェヴィキ政権を樹立した赤軍 Красная армия のみをクローズアップしているわけではむろんなく、赤軍と敵対した白軍 Белая Армия、さらには第三勢力としてのウクライナ民族主義勢力（緑軍 Зелёная армия）やウクライナ・アナーキスト勢力（黒軍 Махновщина）など、革命後のロシア内戦を戦った勢力に関する紹介もしっかりとなされている。そして、これらの勢力の政治的性格や戦力、主たる活動家や司令官の履歴、個々の戦闘行為などを、写真、軍装、遺品といった展示品のキャプションをとおして詳述（もちろんロシア語のみだが）することによって、前のカテゴリーとは対照的に、ロシア革命からロシア内戦にかけての軍事的かつ政治的

な状況が順を追って把握できるようになっているのである。とりわけ、赤軍の主要な対戦相手であった白軍勢力の展示品については、ソヴィエト連邦崩壊後に亡命した旧白軍関係者の遺品がアメリカから多数もたらされていてバランスの取れた展示になっている。

また、このカテゴリーでは、展示の仕方にも大きな変化がみられる。先ほどのカテゴリーまでは展示ケース上方の側壁には戦争絵画や軍旗が掲げられているばかりであったが、ここでは戦争絵画に並んでボルシェヴィキと反ボルシェヴィキが各々作成した政治的プロパガンダのためのポスターがところ狭しと並べられている。たとえば、赤軍指導者のトロツキーが赤鬼になって人々を殺戮するという白軍による有名な赤軍批判のポスターのむかいには赤旗を背景に労働者が力強くハンマーを打ち下ろそうとする赤軍賛美のポスターを配置するといった具合で、ロシア革命とその後の内戦の多様な性質――武力衝突を伴う権力闘争であるとともに思想対立をもとにするイデオロギー闘争でもあることを示している。

加えて、ロシア内戦をテーマとする第五展示室では、塹壕戦の現場を再現したジオラマが展示室の一部に設けられており、ひときわ注意を引く造りとなっている。後述するように、大規模なジオラマを用いた戦場の再現はロシアをはじめ東ヨーロッパの軍事博物館でままみられる（もっとも、塹壕戦の再現は西ヨーロッパの軍事博物館でもそれなりの事例がある）展示の手法であり、これによって展示品を陳列ケースのなかに無造作に並べておくのとはまた一味違ったアピールが可能となっている。この博物館にある他のジオラマに比べるとこの展示室のそれはずいぶん控えめな方だが、それでも視覚に直接的に訴えかけることによって、見るものを――キャプションのように文字＝思考の次元においてではなく――感覚の次元でひとつのコンテクストへと引き連れていくことの効果はきわめて大きい。実際に戦場に立っているかのような視覚的スペクタクルを展開することによって、情動的な次元でのメッセージ伝達が可能となるのである。

ソヴィエト連邦成立後の赤軍を紹介する段になると、展示の内容はますます「政治化」していく。戦間期（一九二三年から一九三八年）の様子を紹介する第七展示室では、兵器や兵装といった軍事的な展示品を紹介しつつも、ウクライナやベラルーシでの治安維持活動といった国内活動や中国やアフガニスタンへの軍事支援といった赤軍の「世界戦略」の様子などがキャプションで詳細に紹介されるようになる。赤軍の仕組みや軍装といった純軍事的な情報のうえにさらに、国内の反ソヴィエト活動鎮圧のためのオペレーション、蒋介石の国民党軍（中国革命軍）創設のために派遣された在華ソヴィエト軍事顧問団の活動など、赤軍の国内外の政治的活動に関する情報が付け加えられるという結構になっているのである。こうして社会主義国家建設という壮大な実験と両大戦間の国際情勢というコンテクストをもとにして赤軍の活動を紹介するというかたちをとることによって、展示はようやくひとつのストーリーを感じさせる向きへとむかっていくことになるのだ。

もちろん、赤軍のこのような紹介の仕方には、ソ連時代の社会主義礼賛のプロパガンダの雰囲気の残滓がみられるというべきであろう。さはさりながら、軍の存在が政治上のコンテクストを担う大きなモメントとして紹介されている点は大きい。国家分裂を阻止しつつ国際的な孤立状態を打破するべく打って出る赤軍の姿を描き出してみせることによって、守るべき国家というモティーフをそれとなく打ち出してみせているのである。しかもこの展示、二〇一五年にリニューアルされたというが、周囲を資本主義国家という敵性国家に取り囲まれた国際状況に対して、また、ウクライナほかの分離主義者の蠢動著しい国内情勢に対して敢然と立ち向かう赤軍という「構図」には、現代ロシアの状況をシンクロさせようとする意図が透けてみえるといったらいいすぎだろうか。旧ソ連構成国という自国の権益が優先されるべき「特殊権益圏」（トレーニン）の離反に対する軍の処断（二〇一四年のクリミア併合）、そして、それに伴う先進国首脳会議（G8）からの追放と欧米諸国による経済政策ほかの対露「封じ込め政策」に立ち向かう軍事国家ロシア――ここで描かれている昔日のソヴィエト連邦の姿はどことなく今日のロシアのそれに重なり合っている。そこで赤軍の戦略

と活躍を肯定的に示してみせるということは、昔取った杵柄よろしく軍事力を中心とする国民の団結を「今・ここ」にアピールすることに結びついているようにおもわれるのである。

ここには国民の愛国心養成のためにソ連時代を再評価するプーチン政権の方針がかなりわかりやすいかたちで示唆されているが、ことはそれほど単純ではない。展示内容のかかる「政治化」は、ソ連の特にこの時代の負の側面をも映し出すことになるのである。同じ第七展示室に設けられた「軍の弾圧 Репрессии в Вооруженных Силах」の展示、すなわち一九三七年から翌年にかけての赤軍大粛清の犠牲者らの展示だ。スターリンが仕掛けたこの大がかりな政治弾圧はソ連共産党員のみならず一般民衆から外国人をも標的としていた。そして、赤軍もまた例外ではなかったのである。それどころか、連隊長クラス（大佐相当）以上の高級将校の七割近くが処刑され、共産党員だった軍人三〇万人のうち半分の一五万人が粛清されたことからすれば、赤軍こそ組織としてほぼ壊滅にひとしい大打撃を受けたといっても決して過言ではあるまい。そうした凄惨な現実を記憶するために、ここでは内戦の英雄で「赤軍のナポレオン」とまで称されながらもスターリンの怨恨と猜疑心の犠牲となったソ連邦元帥ミハイル・トゥハチェフスキーをはじめ多くの赤軍指導者の遺品が展示されている。これらの展示は二〇一五年のリニューアルによって拡張されており、そこにはロシア当局のソ連時代、特にこのスターリン時代に対する両義的な態度が如実に示されているといってよいであろう。過去の再評価は何も無条件というわけではないのである。

とはいえ、ソ連という過去の政治体制に対するこのある種の屈折した態度は、第八展示室の大祖国戦争前夜（一九三九－四一年）および第四カテゴリーをなす大祖国戦争の展示になると一変する。ここでははっきりと赤軍の歩みは「われわれ」の歩みとして語られ、第二次世界大戦のもつ意味と意義が「われわれ」を団結させるナショナルな「物語」のもとに構成されていくことになる。愛国の理由が歴史的パノラマのもとに明らかにされるのである。

ロシアでいう大祖国戦争はドイツ軍によるバルバロッサ作戦の発動、すなわち独ソ戦の開始（一九四一年六月二二日）をもってはじまるが、第二次世界大戦はナチス・ドイツとソ連のポーランド侵攻（一九三九年九月一日・一七日）によってその火ぶたが切られている。そのため、第八展示室は第三のカテゴリーに属するものの、第二次世界大戦前後のヨーロッパにおけるファシズムの伸張をテーマとしている。ここでの展示は、つまるところ、ファシズムという大祖国戦争の対戦相手の紹介にあるといえる。ナチス・ドイツのポーランド侵攻に至る当時のヨーロッパ情勢がパネル展示と多くのキャプションをとおして説明されており、ドイツの「侵略者」としての性格が紹介されるとともに、ベルリンの総統官邸から持ち出された鷲の置物などがヒトラーのものとして展示されている。他にもソヴィエト連邦が間接的に関与したスペイン内戦（一九三六－三八年）、日本の関東軍と交戦した満州国との国境紛争ノモンハン事件（一九三九年）、そしてソヴィエト連邦によるフィンランド侵攻によってはじまった冬戦争（一九三九－四〇年）についての展示が、戦況を示す状況図や指揮を執った司令官についてのキャプションをとおして説明されており、第二次世界大戦の緒戦におけるソヴィエト連邦軍の軍事活動の様子がひととおり把握できるようになっている。ソ連軍の活躍と戦果の度合いによって説明の仕方が微妙に変わっているところが実に興味深い。たとえば、戦車主体の機械化装甲部隊の圧倒的な戦果によって日露戦争の雪辱を晴らしたノモンハン事件をめぐっては、戦況についての詳細なキャプションはむろんのこと、活躍したソ連兵一人ひとりについての饒舌な紹介に加え、参戦した将兵の手紙や報告などが陳列されている。のみならず、金鵄勲章、旭日章、瑞宝章といった日本の勲章が「戦利品」としてご丁寧にも桐箱付きでずらりと並べられているのも印象的だ。ところが、これに対して、フィンランドの速やかな占領という所期の目的を果たし得なかったばかりか、敵軍の頑強な抵抗にあって大苦戦を強いられた冬戦争については、戦況についての説明がキャプションをとおして加えられるものの、展示の大半は写真パネルとその手短な説明で占められており、ノモンハンの多弁さに比べると明らかに素っ気

なさが目立つ。「なかったこと」にされるよりはましだが、「われわれ」の「物語」にはやはり勝利にこそふさわしいということなのだろう。

その点、第九展示室から第一八展示室まで延々と続く大祖国戦争をめぐる第四カテゴリーの展示は、ソヴィエト連邦と赤軍の大勝利という結末が約束されているだけあって、その饒舌さがますます際立つことになる。第九展示室はまず「われわれ」の敵、すなわちファシズムのドイツについて説くところからはじまっている。簡潔にではあるが、ナチス・ドイツのレイシズム的思想、かかる思想にもとづく「生存圏 Lebensraum」確保のための東ヨーロッパ征服計画、そして、ドイツとその同盟諸国（イタリア、ハンガリー、ルーマニア、フィンランド）の軍事作戦計画に関する説明が写真やキャプションを交えてなされている。そのうえで、展示は「われわれ」の側、すなわち侵略者を迎え撃つソ連側の迎撃体制についてパネル説明をおこなうという結構をとっている。こうして敵味方を明確に分類し、ソ連共産党機関紙「プラウダ Правда」に掲載されたスターリンの大祖国戦争開始宣言の記事や祖国防衛を訴えるプロパガンダポスターなど戦争への高揚感を掻き立てる資料を数多く持ち出すことによって、展示を見る側の愛国心の鼓舞を狙っている点がここでは注目に値する。展示はこうして見学者に単に客体たるのではなく、歴史の主体たるべきことを要求しつつ、「われわれ」の「物語」を語りだしていくことになるのだ。

ただし、「物語」はいきなり苦難からはじまる。周知のとおり、ドイツ軍は電光石火の縦深攻撃によって短期間のうちにソヴィエト連邦内に深く侵入し、戦況は当初「われわれ」にとって圧倒的に不利だったのである。そのため、第九展示室では、赤軍が実戦投入した新しい兵器の数々を紹介することに関心を誘導している。たとえば、当時としては破格の重戦車（四五トン級）であるＫＢ－１（英語表記ではＫＶ－１）や世界初の自走式多連装ロケット砲 БＭ-８（英語表記ではＢＭ－８、通称「カチューシャ Катюша」）などの活躍が写真やキャプションの説明をとおして強調することによって、思わしからざる戦況のもとでも、赤軍の戦闘行為に一定の効果があったことをかなり露骨に示唆するというわけだ。加えて、スモレンスクの戦い（一九四一年）に焦点を合わせ、この戦闘が名将の誉れ高いハインツ・グデーリアンやヘルマン・ホト率いるドイツ装甲軍団を激しく消耗させたこと、結果としてドイツ軍から大戦の勝機を奪い去るきっかけとなったことなどを成果として詳細に紹介するなど、敗れはしたものの勝利のための成果を読み取れるようにしてある点が非常に目を引く。その結果、ここでの展示は、来るべき勝利への期待を抱かせるものとなっているのである。

以後、勝利へと邁進するソヴィエト連邦と赤軍の姿は、第一〇展示室から第一七展示室に至るまで、独ソ戦の主要な戦闘を紹介するかたちで語られることとなる。順にみていくと、ドイツ軍の進撃を押しとどめたばかりか後退させたモスクワの戦い（一九四一－四二年、第一〇展示室）、九〇〇日近くにも及ぶ包囲に耐え抜いたレニングラード包囲戦（一九四一－四四年、第一一展示室）、史上最大の都市攻防戦にして独ソ戦の分水嶺となったスターリングラード攻防戦（一九四二－四三年、第一二展示室）、赤軍の軍事的な圧倒的優位を決定づけたクルスクの会戦（一九四三年、第一三展示室）、ドニエプル川強硬渡河を多大の犠牲を厭わず断行したドニエプル川の戦い（一九四三年、第一四展示室）、ドイツ中央軍をほぼ戦闘継続不能に追い込んだバグラチオン作戦（一九四四年、第一五展示室）、バルト三国からドイツ軍を放逐してこの地域を再占領したバルト海攻勢（一九四四年、第一六展示室）、そして、ドイツの首都ベルリンを目標とした東ヨーロッパにおける攻勢（一九四五年、第一七展示室）といった具合だ。ここでの展示は大祖国戦争という歴史的事件をもっぱら戦闘の相のもとに、もう少し正確にいえば、純粋に軍事的な相のもとに把握し説明している。

そのようなスタンスは、これらの展示が、例外なく戦術的な情報の提示に多くのスペースを割いていることからもうかがえる。パネル展示にしても、まずはドイツ軍と赤軍双方の作戦計画の概略が示され、その実

際の成り行きが会戦ごとにかなり長文のキャプションで示されている。また、そのための補助資料として、両軍の作戦行動や兵員数の推移を図示した状況図が示され、会戦の時系列的な展開がヴィジュアル面でも確認できるようになっている。のみならず、赤軍の陽動部隊や偵察部隊の活動に関する説明とこれらの部隊が実際に鹵獲したドイツ軍の装備品の展示に加えて、戦車戦を実行するための工兵部隊の役割と彼らが用いた誘導式地雷探査機と地雷、ドイツ軍占領地で活躍したパルチザン部隊の役割と彼らが用いた武器などの実物、北極圏における雪中戦の方法と実際に戦闘を行うにあたって必要となる装備品、さらには敵軍包囲下のレニングラードで生産されたスダエフ短機関銃 Пистолет-пулемёт Судаева（PPS-42 および PPS-43）の仕組みなど、軍事技術上の説明は相当な程度にまで及んでいる。こうして戦争を構成する副次的なモメントをもさまざまなアングルから幅広く紹介することによって、戦闘行為についてより幅広い理解がはかれるようになっている点で、この戦争に関する展示は、他の時代の戦争についての展示とはほとんど比べ物にならないほど充実しているといってよい。また、それぞれの戦闘では、作戦を指揮した司令官たち、たとえば、ゲオルギー・ジューコフ、ヴァシーリー・チュイコフ、アレクサンドル・ヴァシレフスキーなどの前線で活躍した司令官らの軍歴や活躍の事績が多数紹介され、彼らの使用した軍服や拳銃といった軍装品などもあわせて展示に供されるなど、軍事史的にも丁寧なフォローがなされているのも特徴的であるといえる。

といっても、展示はこうしたどちらかといえばマニアックで微視的な情報に尽きているわけでは決してない。それどころか、ここではこれらの情報を補完するべく、さまざまな視覚的なスペクタクルが展開されている。各展示室にはおびただしい数の赤軍とドイツ軍の兵装や兵器が展示してあるが、なかには異様なインパクトを放つオブジェのごとき巨大な展示物があって、その存在感がホール全体の雰囲気を支配している。たとえば、第一〇展示室の側壁いっぱいには、モスクワの戦いで撃墜されたドイツ軍の爆撃機ハインケル Heinkel He-111 の残骸（尾翼部分）の実物が展示してあり、その姿はナチス・ドイツ軍の威容を示すとともに、ドイツ軍を打ち破った「われわれ」の偉大さを可視的に実感させるものになっている。いずれにせよ、戦闘の成果を実際にまのあたりにさせてくれているという意味では、非常に説得力のある「証拠」になっているといえよう。また、第一一展示室のホール中央に展示してあるソ連製トラック ЗИС-5（英語表記ではＺＩＳ－５）もたいへん印象深い。レニングラード包囲戦の際のソ連側の唯一の補給路となった通称「命の道 Дорога жизни」（冬期に凍結したラドガ湖上を駆けていた）を実際に疾走したこのトラックは、それじたいが象徴的な意味を帯びた存在になっている。レニングラードからの避難民を満載した命の車、逆にレニングラードに食料や生活物資を送り込んだ生活の車、レニングラード市民とソヴィエト人民とを結ぶ絆の車、祖国を守り抜いた市民の忍耐と連帯を示す愛国の車――歴史の苦難はこのトラックにさまざまな意味あいを与えており、見学者にそのことを実感させる歴史の証人になっている。ほかにも、パルチザン活動が活発だったブリャンスクから運び込まれた木組みの地下壕の実物（第一五展示室）やレンドリース・プログラムにもとづいてアメリカから赤軍に供与されたウィリス・ジープ Willys MB（第一六展示室）など、大祖国戦争にまつわる大型の展示品は数も多く、それぞれの担っているメッセージ性は非常に強烈でインパクトも大きい。百聞は一見に如かずとの格言のとおり、こうした歴史的な意味あいを帯びた展示品を示してみせることによって、見学者に戦闘への実感を抱かせるとともにそこに込められた政治的な意味合いをも示唆してみせようとしているのだ。

展示に込められたそうした意図は、戦争のイメージを具体化するジオラマの手法がここで特に規模を拡大して大々的に多用されていることからもうかがい知られよう。なかんずく、大祖国戦争を語る上で欠かせない三つの戦闘シーンが、フロアぶち抜きのかなり精緻なジオラマによって再現されている。まずは、大規模かつ長期にわたった都市包囲戦であるレニングラード包囲戦（第一一展示室）であるが、ここではレニングラードの大通りにバリケードを施した荒涼たる風景を提示することによって、敵軍が目前に迫っている緊迫

した状況と包囲戦による市民生活の限界状況が表現されている。次は、両軍あわせて二〇〇万人もの死傷者を出して独ソ戦中最も悲惨な戦闘となったスターリングラード包囲戦（第一二展示室）。「ヴォルガのむこうにわれわれの土地はない За Волгой для нас земли нет!」と題されたこのジオラマでは、灰色の空のもとに赤々と映し出される都市の廃墟を背景として、平場の中央には対戦車砲の周囲に瓦礫や使用された薬莢と弾薬箱が多数放置されており、破壊され尽された都市の惨状と戦闘の凄まじさが感じられる作りになっている。三つめは、六〇〇〇台もの戦車が参加し史上最大の戦車戦と呼ばれたクルスクの会戦（第一三展示室）であり、戦闘機飛び交う大草原の背景にはティーガーⅠ重戦車 Tiger Ⅰ、Ⅴ号戦車パンダーⅤ Panther、重駆逐戦車フェルディナンド Ferdinand といったドイツ軍の最新鋭兵器の数々の戦闘の様子が描かれ、ティーガーの前には全長七メートルもの巨躯を誇る赤軍の 57-mm ЗИС-2（英語表記は ZiS-2）対戦車砲の実物が実戦配備風に据えられているという結構になっている。大会戦の激烈さと勇壮さが表現されているこのジオラマを前にすると、戦場にじかに立っているかのごとき感覚を生じさせる造りになっている点で非常に印象的だ。いずれにせよ、かかる展示方法を多用するやり方からは、見学者の感覚印象にダイレクトに訴えかけ、戦闘イメージをひとつの像のもとに一元化して理解させようとする意図がありありと浮かび上がってこよう。各人に刻み込まれる共通の記憶をこうしてヴィジュアル的に整理し統合することによって、展示は「われわれ」の「物語」という政治的ストーリーの視覚的世界を決定づけていくことになるのだ。

ところで、「物語」が「われわれ」のものである以上、「われわれ」一人ひとりの顔が思い浮かべられるようにするのでなければならない。ここでの展示は、以上のようなマクロな歴史的モメントに加えて、戦闘における個々の兵士や一般市民らの事蹟といったミクロな個人的モメントに関する紹介を全体的にちりばめることによって、「われわれ」の具体的な相貌を描き出す取り組みを行っている。前述のハインケル機を撃墜した赤軍パイロットのヴィクトール・タララリン、赤軍唯一の女性パイロットとして「タラーン Таран」（いわゆるエアラミング、敵機への体当たり攻撃）を敢行して散華したエカテリーナ・ゼレンコ、敵軍のトーチカに身を投じて銃眼をふさいで戦死したアレクサンドル・マトローソフ、ドイツの名狙撃手エルヴィン・ケーニッヒと伝説的な「スターリングラードの決闘」を演じた狙撃兵ヴァシーリー・ザイツェフ……ここでは大祖国戦争を戦った数々の「ソヴィエト連邦英雄 Герой Советского Союза」たちの経歴と活躍がキャプション、写真パネル、彼らの所持品、ソ連邦英雄の表彰状とともに一人ひとり紹介されている。さらに異色なところでは、二三名ものソ連邦英雄を輩出した女性部隊である第四六親衛夜間爆撃航空連隊に関する展示（第一四展示室）が目を引く。赤軍パイロットのマリーナ・ラスコーヴァの考案で編成されたこの連隊は、コーカサスの戦いで夜間に敵兵の睡眠を妨害するいわゆるハラスメント攻撃や後方の物資輸送などを主な任務としており、ドイツ側からは「夜の魔女 Nachthexen」と呼ばれていたが、その多くが志願兵であった彼女らの活躍もまた、「われわれ」の実相をなすものとして紹介されている。このようなかたちで祖国防衛のための個々人の具体的な活躍の様子を浮き彫りにすることによって、「われわれ」は具体的な名前と貌のもとに語られる存在となり、戦争は一人ひとりの顔を持った人々による「物語」へと読み替えられていくことになる。帝政時代を扱ったカテゴリーにみられた単に資料を並べるという他人事のような展示方法とはまったく対照的に個人語りの世界を感じさせる展示方法のもと、軍による祖国防衛の任務はここでまさしく追体験する「べき」できごととして見学者の前に提出されることになるのである。

ここまでくると、大祖国戦争は、数多の人々が力を合わせて祖国ソヴィエトを守り抜いた英雄的行為となる。しかも、きわめて困難で苦難に満ちた状況のもとで「人類の敵」たるファシズム勢力を破滅させ全ヨーロッパを解放した正義の事蹟として、そしてそれゆえに「われわれ」を真に偉大にする経験として位置づけられるに至るのである。とりわけアウシュヴィッツをはじめとするナチス・ドイツによる強制収容所におけるナチス・ドイツの犯罪行為と赤軍による強制収容所の解放が対比的に紹介される第一七展示室の展示にさ

しかかると、そうした歴史的使命への高揚感のようなものがいやがうえにも掻き立てられ、赤軍の「解放者」としての相は今や勧善懲悪のステレオタイプなモティーフのもと疑問をさしはさむ余地のないものとして明示されることになる。そして、その延長線上に「われわれ」の存在が神聖な「物語」へと聖別される瞬間がやってくる。つづく第一八展示室の「勝利の間 Зал Победы」に至って、誇らしい愛国心の凱歌のヴォルテージは最高潮に達することになるのだ。

博物館二階の正面に設けられた同館最大のホールである「勝利の間」は、その名称からして強いメッセージ性を帯びている。それは「われわれ」が永遠に記憶するべき偉大なる歴史と人類の模範たる「われわれ」の姿がこれでもかといわんばかりに映し出されている特別な空間なのである。そのただならぬ雰囲気は、参戦したソ連邦英雄の名前を一人ひとり金字で刻みこんだ大理石の柱、すべての赤軍の「戦線 Фронт」（赤軍用語で他国の方面軍・軍集団に相当）の名前が記された上部側壁、そして聖堂をおもわせる背の高いドーム状の天井など、その内装を一瞥しただけでも容易にうかがい知られよう。正面の壁面には、一九四五年六月二四日にモスクワで催行された対独勝利記念パレードで赤軍兵士たちがナチス・ドイツ軍の軍旗をクレムリンの壁前に放り投げる様子を撮った写真パネルが壁いっぱいに掲げられており、赤軍の勝利が誰の目に見ても明らかなように示されている。そして、ホール中央に設えられている勝利の「祭壇」のごとき大きなガラスケースは、上段にベルリンの帝国議事堂に掲げられた赤旗という「聖遺物」を収め、下段にはナチス・ドイツの国章ライヒスアードラーReichsadler（鷲の紋章）を打ち捨てるかのように横たえているのだ。加えて、「祭壇」と大写真の壁面の足下には、背の低いガラスケースのなかに鹵獲した大量のドイツ軍旗と無数の鉄十字勲章（一九三九年章）が無造作にちりばめられて、いかにも戦利品として晒されているかのごとき眺めになっている。また、左右と背面の側壁には大祖国戦争で活躍した赤軍の司令官たちの礼装、勲章、勲記、所持品などがあたかも居並ぶイコンのごとく陳列されていて荘厳な雰囲気を醸し出すなか、大祖国戦争の最終章をなすベルリンの戦いと対日参戦に関する展示がごく簡単にではあるがなされている。そこではドイツと日本の降伏文書調印の様子もパネルで明示され、ヨーロッパと極東におけるソヴィエト連邦の獲得領土が地図上に示されることによって、祖国の勝利が歴史的に確認できるようになっている。祖国防衛の任務ばかりでなく、ナチス・ドイツという憎むべきファシズム勢力を打倒する「正義」の任務をも達成したという「事実」は、こうして偉大な業績となって否応なく見学者に迫ってくることになる。大祖国戦争はこのようなかたちでひとつの完結した「われわれ」の「物語」へと仕立て上げられていくことになるのである。

ここには現代ロシア国家の願望ともいうべき歴史観が惜しげもなく披露されているが、願望はあくまでも願望であって必ずしも現実であるとはかぎらない。人々の愛国心を組織化して善き「ラシャーニン」たらしめようとするこのような展示方法には、やはり一種のフィクションが混在していると指摘せざるをえないであろう。独ソ戦がドイツ側の一方的な攻撃をもってはじまったこと、赤軍がドイツとの死闘の末にナチス・ドイツという全体主義体制をヨーロッパから駆逐したことは、なるほどゆるがせにできない事実ではある。しかしながら、ソヴィエト連邦がファシズムの純粋な被害者にして勧善懲悪の解放者であったかとなると話はまた別、というより歴史的事実からして必ずしも首肯しがたいというのでなければならないのではないだろうか。

まず、ソヴィエト連邦は、ある時点までは、むしろナチス・ドイツの共犯者であった。独ソ不可侵条約（いわゆるモロトフ＝リッペントロップ協定）の秘密議定書にもとづいて、両国はポーランドをカーゾン線に沿って東西に分割すること、バルト三国・フィンランド・ベッサラビアをソ連の支配下におくことに合意しており、これがヨーロッパにおける二度目の世界大戦の事実上のトリガーとなったのである。事実、ナチス・ドイツは同条約締結（一九三九年八月二三日）からわずか一週間後の九月一日にポーランド侵攻を開始し、ソ連も九月一七日にはポーランド東部に侵攻している。さらにソ連は二か月後の一一月にフィンランド

併合を要求して冬戦争を引き起こし、翌一九四〇年にはバルト諸国を軍事占領して併合して、ドイツとの協働のもとに軍事活動を行っているのだ。このような経緯から、近年では独ソ不可侵条約こそが第二次世界大戦の元凶とする声が大きくなり、欧州議会は二〇〇九年には同条約締結日を「ブラックリボンデー」（スターリン主義とナチズムの犠牲者のためのヨーロッパ追悼の日 The European Day of Remembrance for Victims of Stalinism and Nazism）とする決議を、二〇一九年には独ソ双方の「全体主義体制」が戦争を招いたとする決議を採択している。ロシアはこれらの決議に反発し、二〇二一年になってソ連をナチス・ドイツと同一視することを禁止する法律を制定するに至っているが、このことじたいソ連を単なる戦争被害者としたいロシア当局の願望と歴史的現実との摩擦の存在を如実に指し示しているといえよう。大祖国戦争を国民統合の核心として絶対的に正当化する必要のある立場からすれば、ソ連が世界大戦を引き起こしたとする考え方などもってのほかであって到底受け入れがたいというほかない。しかしながら、そうした考え方こそ、赤軍によって蹂躙され亡国の憂き目にあった多くの人々にとっては断じて許容しうるものではないのである。

ここから、ソヴィエト連邦と赤軍を勧善懲悪の精神に貫かれた解放者とすることへの強い疑念が生じることになる。たとえば、第八展示室には、一九四〇年のバルト三国への赤軍進駐の様子が展示されており、リトアニア・ラトビア・エストニアにおいて赤軍が解放者として歓迎されていたことを示す写真とキャプションがさりげなく差し挟まれているが、そのようなやり方もまた望ましい結論に合わせて事実を都合よく解釈していると指摘せざるをえまい。もちろんバルト諸国には多くのロシア人が居住していた。そればかりか、ソヴィエト連邦を支持し併合を望む社会主義者も数多く存在していた。したがって、赤軍を歓迎する向きもあるにはあったであろうし、展示にあるようなシーンもあるいは実際にみられたのかもしれない。しかしだからといって、この国々の大半の人々にとって赤軍が解放者であったかというと、それはそれできわめて疑わしい。占領早々現地政府を解散させて苛烈な支配を行い、侵攻したドイツ軍から同地を奪還したのちには数十万もの人びとを反ソヴィエト分子としてラーゲリ лагерь（強制収容所）送りにした赤軍とソ連に対するバルト諸国の評価は、少なくとも解放者ではなかった。今日、ヴィリニュス、リガ、タリンのいずれにもこの時代の記憶を忘れまいとする占領博物館なるものが存在しているという事実が雄弁に物語っているように、赤軍はむしろ無法かつ無慈悲な侵略者でしなかったのである。第二次世界大戦時の赤軍の犯罪的行為はほかにも、カティンの森事件への関与（実行主体は秘密警察たる内務人民委員部）、「解放」したはずの諸地域での略奪、強姦、住民殺害など、他国ではこれまでさまざまなかたちで問題視されているが、ここではその一切が無視されている。してみれば、赤軍の活動の軌跡を多方面から突き放して批判的に考察し論証しようとする精神など、以上の展示には微塵もないといってよい。そこにあるのはむしろ国民統合という目的のためには歴史的情報の操作と取捨選択をもいとわない政治的スタンスであるというべきであろう。「勝利の間」の展示に如実にあらわれているように、この場で語られるべきは歴史というよりは神話なのである。

その際、大祖国戦争をめぐる展示からうかがえるもうひとつの歴史問題について触れておきたい。それは当時のソヴィエト連邦の最高指導者であったスターリンの存在である。大祖国戦争を結果的に勝利へと導きソ連をアメリカに伍する超大国へと押し上げた功績は、何といってもこのグルジア人抜きには語りえない。つまり、偉大な戦争を勝利した偉大な指揮官というわけだが、第七展示室にみたように、高級将校の大多数を粛清して赤軍を大混乱に陥れたのもまたこのスターリンだったのである。赤軍のみならず社会全体を恐怖のどん底へと突き落としたこの人物は、そのネガティヴな印象のあまりの強烈さゆえに、今なおロシア社会における評価が定まっているとはいいがたい。ヒットラーにならぶ残忍な独裁者として強く忌避される一方、ロシアの歴史上もっとも偉大な人物とされるなど毀誉褒貶かまびすしく、博物館展示においては焦点のあわせ辛い対象になっているのである。プーチン政権下ではソヴィエト連邦へのノスタルジーから、スターリンは再評価の途上にあるといえるが、それでも現在のロシアの世相を反映してか、大祖国戦争を扱ったこの展

示のなかではさほど特別に扱いはされていない。スターリンについては、祖国に勝利をもたらした戦争指導者として説明し、礼装や勝利勲章をはじめいくつもの所持品をキャプション付きで紹介はしているものの、個人崇拝とはほど遠い抑制のきいた展示になっている。その意味では、こうした紹介のあり方は、スターリンをめぐって揺れるロシア社会の一端を垣間見せている点で興味深い。無視はできないが、かといって手放しで称賛することも憚られるこの人物をめぐっては、その評価が見学者に判断が委ねられているように思われる。

そのような雰囲気は、実は次の第五カテゴリーの展示にも見受けられる。われわれの考察もいよいよ第二次世界大戦後のソヴィエト連邦に到達したが、世界を二分する超大国になったこの国にあてがわれた展示室はわずか三つ、大祖国戦争のそれに比べるといかにも少なく手薄である。しかも展示の内容も先ほどのような「われわれ」の神話といったプロパガンダ色に乏しく、実に淡々として地味としているといってよい。たとえば、第一九展示室では、一九四六年に赤軍から改組したソヴィエト社会主義共和国連邦軍 Вооруженные силы Союза Советских Социалистических Республик がテーマとなっているが、ここでの展示はもっぱら一九六〇年代までの軍事技術に関する内容にかぎられている。たとえば、科学者らによる核兵器の開発、地上部隊の用いる近代化された銃器・化学兵器・戦車砲などの兵装、輸送機からの空中投下が可能で実際に二〇回投下された АСУ-57 空挺対戦車自走砲の実物、空軍を中心にすすめられた宇宙開発と有人宇宙飛行を企図したボストーク計画、さらには一九四九年の配備以来世界で最も使われた軍用銃としてギネス認定された自動小銃 AK-47（いわゆるカラシニコフ）についての展示といった具合である。そこではたしかに「われわれ」の「物語」を語ろうとするひとつ前の展示室までの熱量ほどのものは感じられないものの、ユーリ・ガガーリンをはじめとする宇宙飛行士たちの紹介が異彩を放っているように、地味ながらも「われわれ」の成果を確認したいとする作りにはなっている。

そうした雰囲気は、次の第二〇展示室に足を運ぶとより明確になってくる。この展示室ではソヴィエト連邦軍の海軍・空軍・防空軍に関する展示がメインになっており、防空軍に関する展示がひときわ目を引いている。というのも、ここでは、冷戦下のアメリカ空軍の対ソ偵察飛行活動の実態がクローズアップされているからだ。その証拠が展示室中央に横たえられたアメリカ空軍の偵察機ロッキード U-2（通称ドラゴンレディ）の残骸とその真上につるされているソ連の S-75 地対空ミサイル（いわゆる SA-2 ガイドライン）である。この U-2 は一九六〇年六月一日にソヴィエト連邦を高高度から偵察中にスヴェルドロフスク州上空で S-75 地対空ミサイルによって撃墜されたもので、アメリカがソヴィエト上空をわがもの顔で飛び回っていた事実が白日の下にさらされ政治問題化した「U-2 撃墜事件」のまさしく当事者の機体の残骸なのである。事件の顛末はトム・ハンクス主演の映画「ブリッジ・オブ・スパイ」（監督スティーヴン・スピルバーグ、二〇一五年）で描かれていることもあって人口に膾炙しているかもしれないが、ソ連のミサイル技術の進歩に対するアメリカの焦りから出た偵察活動でいわば返り討ちを喰らわせたのであるから、ロシアからすれば、この展示品は「われわれ」の愛国心をかきたてるには格好の材料であろう。この時期のソ連が次々と軍事技術を向上させ、冷戦をリードする能力を有していたことを示すには、こうした成功はぜひとも欠かせない貴重な証人になっているのだ。

ソヴィエト連邦のこうした積極的な相は、第二一展示室においてよりはっきりとしたかたちで示されることになる。まずは、ホール入り口すぐのところで天井にまで届く大陸間弾道ミサイル（ICBM）P-16（英語表記では R-16）の二段目ブースターの原寸大の巨大レプリカがソ連軍の誇るミサイル兵器の威容を告げている。ここではさらに戦略ロケット軍が構築したロケットサイロによる攻撃体制の仕組みを模型でもって紹介するなど、世界的にソ連がリードしたこの分野について詳細な説明が加えられており、「われわれ」の自尊心をくすぐる内容が強調された展示になっている。また、幾分広いこのホールには、ソ連軍が主として社会

主義陣営の国々に与えてきた軍事援助の様子が写真パネルとキャプションによる説明を中心にしてこれもかなり詳細に紹介されていて、世界的プレーヤーとしてのソ連の活躍ぶりが一瞥できるようになっているのが印象的だ。ただ、朝鮮戦争からアフガニスタン紛争に至る国際紛争へのソ連軍のコミットメントの様子を紹介する一方、失敗に終わったアフガニスタン紛争への介入にもかなりのスペースを割いているのもまた印象的であるといえる。まだ悲劇としての記憶が抜けないのか、あるいはソ連崩壊の遠因となったからなのか、これまで自国の敗北をすげなく素通りしてきたはずのこの博物館の展示は、ことアフガン関連については、参戦した多くのソ連兵の活躍がキャプションと写真パネルで説明されているほか、大判の戦争絵画や実際に使用された無反動砲 Б-10（英語表記では B-10）ばかりでなく、激しい攻撃にさらされて苦戦している様子を再現したジオラマなど、具体的な状況が追体験できる展示の形態をとっている。そして、ソ連邦の展示がさらにチェルノブイリ原発事故に対応するソ連軍兵士の紹介をもって結びとされていることは非常に示唆的であるといえよう。ソ連はみずからの得意であったはずの科学技術と国際貢献によって傾いてしまったのだ――この展示室の内容からは最後にそのようなメッセージが示唆されているように思われるのだ。

さて、いよいよ最後の第六カテゴリーになった。テーマは現代のロシア連邦軍だ。展示室は第二二展示室と第二三展示室の二つであるが、ここには先にみた大祖国戦争にまつわる「ラシャーニン」の大義を高らかに謳いあげるかのような強烈なメッセージ性もなければ、第二次世界大戦後のソ連についての展示につきまとっていたどこか哀愁漂わせるようなノスタルジックな雰囲気もほとんどない。二つの展示室を使って陸軍・海軍・宇宙空挺軍（旧空軍）の三軍と戦略ミサイル軍と空挺軍の二つの独立兵科に関する基本的な情報と軍装品について紹介するという体をとっていてどこか事務的な雰囲気だ。新生ロシアになって白赤青の国旗と双頭の鷲の国章が復活したことなどが挙げられてはいるものの、全体としての展示もどこか淡白で写真パネルを多用する一方でキャプションによる説明はそれほど多くない。

ただし、ロシア連邦軍が経験した三つの出来事については、独立したコーナーが設けられていてこのホールのなかでは特別な位置にあるのがわかる。ひとつは、二〇〇八年に勃発した南オセチア紛争であり、ジョージア軍とロシア軍の展開の推移を示した状況図をはじめ、当時使用された軍装品とともに戦場の様子を撮影した写真パネルや従軍兵士の履歴と活躍を説明したキャプションが多数展示されていて、特にまだ若い兵士の数ある証言が引き立つ作りにしてある。二つ目は、二〇〇〇年にバレンツ海での演習中に魚雷の爆破事故を起こして沈没した巡航ミサイル原子力潜水艦クルスク号についてである。ソ連崩壊後に就航した比較的若く優秀な艦でありながら乗員一一八名全員死亡という痛ましい結果に至ったこの事故については、ありし日のクルスクの威容が描かれた大きな絵画の両サイドに乗員の遺族から集められたいくつかの遺品がならべられて祭壇のような趣をみせている。三つめは、同じく二〇〇〇年の第二次チェチェン紛争で起こった七七六高地の戦いだ。この戦闘に参加したプスコフ空挺師団第一〇四空挺連隊の第六空挺中隊は九〇名中八四名を失いながら敵方に大損害を与えるのに成功したが、その様子が状況図や写真パネルなどで小さいながらもコンパクトにまとめられている。これらはみな、尊い自己犠牲の精神のもとに任務を遂行する「兵士の鑑」の神髄を示してみせるプロパガンダになっているといえよう。ロシア中央軍事博物館はこうして現代の「英雄」――一昔前のわが国ではさしずめ「軍神」ということになろうか――の姿を誇示しつつその展示を終えることになるのである。

Ⅲ

以上、モスクワのロシア中央軍事博物館の展示の様子を駆け足ながら概観してきた。その特徴は、端的に

いえば、戦争こそが各人をひとつの「ラシャーニン」として一体化する神聖なモメントであることを確認し、戦争を戦った軍人たちこそが「われわれ」の師表とならねばならぬということを広く知らしめるところにあるといえよう。見方をかえれば、それはつまり、ロシア国民のもつべき愛国心というものに具体的なイメージを付与しようとする試みになっているともいってよい。厳格な上意下達を旨とする精神をもって祖国防衛という崇高な業務にあたること、一致団結して勝利というひとつの目的へとひたすら邁進すること、自己犠牲をも厭わない無私の精神をもっておのれを律すること、そして、祖国の栄光と国民の名誉をすべての価値に優先させること。展示をとおしてあらわれてくる軍人の姿は、まさしくこのような意味での愛国心を命がけで実践した「求道者」であり、そうであるがゆえにモラルのうえで賞揚されるべき権威ある存在として位置づけられることになる。そして、かかる権威ある存在を模範とする人間像こそがここで求められている「われわれ」の姿なのであって、そのようなあらまほしき「ラシャーニン」たろうとするよう教化するところにこの博物館の展示の目的があるというわけだ。軍や軍人に対する信頼度と親近感が――政府当局に対する根強い不信感とは対照的に――今もって高いここロシアにあっては、一般に軍人は社会の模範的存在とされているが、ここではそのようなエートスに乗りつつ、逆にかかるエートスを軍事史的に味付けしながら再生産しようとしているのである。

それゆえ、ロシア中央軍事博物館においては、軍や軍人は批判的考察の対象というよりも追体験と共感の対象とされている。そして、その歩みとしての戦史＝歴史もまた、もっぱら国民統合を実現するためのまさしく核心をなすものとして取り扱われている。こうして軍とその歩みを「聖別」するという意味では、この博物館のスタンスは一九世紀来の軍事博物館のクラシカルなグラマーに今なお忠実であるというべきであろう。すでにみたように、大祖国戦争を中心とする以上の展示は、国民統合のための愛国心の醸成という大目標のもと、軍や戦争についてもっぱら戦術的あるいは軍事技術的な関心のもとに紹介するところにかなり大きなウェイトが置かれている。いわゆる「古い軍事史」の方法論そのままであるが、そこには軍事的なものを何か別のコンテクストのもとで考察することによって、軍事史そのものを相対化してみせようとするむきなどほとんどみられないのである。軍事を孤立した現象と捉えるのではなく、社会の一部として把握することによって従来の軍事観を乗り越えようとする「新しい軍事史 new military history」のごとき考え方には、したがって、ここでは入り込む余地はまったく残されていない。特定の政治的目標のための歴史の組織化を課題としている以上、この博物館に求められているのは、断じて過去にまつわる批判的な問い直しなのではない。それはむしろ、国家の「みせたい歴史」と「あるべき国民」を誤解の余地のないかたちで示してみせることでしかないのである。

前もって決められた結論に歴史の事実をあわせて論じるこのようなやり方は、理屈のうえでは単なる誤謬でしかないが、こと政治の世界においてはそれほど珍しいことではない。それどころか、世界中の軍事史博物館で今もって普通に採用されているスタンダードなグラマーのひとつであるが、ことロシアにおいては、このような牽強付会な方法論のもとに愛国心を育成するやり方が年々その露骨さを増すようになっている。プーチン政権はとりわけ若年層の取り込みに躍起になっており、ともにロシア国防省所轄の軍事テーマパーク「愛国者公園 Парк Патриот」と全国軍事愛国運動「ユナミルヤ ЮНА́РМИЯ（青少年軍の意）」などはその象徴的存在であるといえよう。前者は、ロシア連邦軍の装備品の展示のほか、大祖国戦争のパルチザン体験施設、多機能射撃センター、軍事戦術ゲームセンター、乗馬施設、エクストリームスポーツエリアなど多くのアトラクションを備え、それこそ大人から子供まで楽しめるモスクワ郊外の総合施設であり、その名のとおり愛国心を特に軍事と結びつけて浸透させることに特化した「ミリタリー・ディズニーランド」だ。また、後者は、八歳から一八歳までの若者を組織して、愛国心教育、軍事史や戦術の教育、銃火器を用いた軍事教練、ロシア連邦軍への入隊の奨励、戦勝記念パレードへの参加などを行う青少年グループだ。両者と

もに若者の日常生活そのものを愛国心というイデオロギーで貫くことによって、将来世代の育成を図ろうとしているが、ここまでくるとやっていることはもはや教育というよりはむしろ刷り込みあるいは洗脳に近い。大祖国戦争の栄光の歴史は、ここでとうとう疑いをさしはさむことすら許されない「真理」になるのだ。

むろんターゲットは若年層ばかりではない。冒頭にあげたように、ロシア社会全体がこのようなエートスを常態化するための愛国的なモメントによってあふれかえっているといっても決して過言ではない。加えて、大統領が「ロシアの国境には終わりがない」などと嘯き、知識人たちが周辺地域（特に旧ソ連構成国）を自国の権益が優先されるべき「特殊権益圏」（トレーニン）などと叫ぶことによって、「偉大なるロシア」というある種の大国意識を刺激し強い国家を演出することが今ではもはや日常の風景となってしまった。そこにはかつての全体主義国家もさぞやとおもわせる趣すらあるが、見方をかえれば、それは実際にはそうせざるをえないという側面もある。そこにあるのは、ロシア国民一人ひとりの心のうちに潜在する大国意識に訴えかけることによって人々の意識をなんとかつなぎ合わせるのでなければ、実は国家の求心力を保つことすら覚束ないという切迫した事情なのである。冒頭にみたロシア国家の国民統合の難しさと脆弱さゆえに、この国の指導者たちはつねに強いメッセージを発して国家の求心力を維持し人々のナショナルな団結を損なわないようにする必要に迫られているのである。といっても、彼らがどれほどロシア国家の偉大さを対外的に発信しようとも、また、どれほど大国主義的なナショナリズムを鼓舞するにしても、これとて問題の根本的な解決になっているとはいえないというべきであろう。大国意識が対外的な誇らしさをもたらしてくれるからといって、それがそのまま人々の内なる団結に結びつくわけではない。一見して過剰におもわれるロシアの愛国心育成運動の背後にはこの国家の内的存続にかかわる実に厳しい現実が見え隠れしているのである。

また、ロシア国防省が放送局の経営に乗り出してみたり、巨大な軍事テーマパークを作ってみたり、かつての「ヒトラー・ユーゲント」顔負けの青少年愛国運動を全国的に組織してみたりするのも、事情はそれほど変わらないといえるのかもしれない。目下のロシア連邦軍は定足数（およそ一〇〇万人）を大きく割り込んでしまっており、人員の面では組織が先細りする恐れにさらされてしまっているのである。先に述べたとおり、ロシア国内では軍や軍人は非常に尊敬され信頼される存在ではあるものの、兵営内のいじめによる自殺者の増加や兵員による犯罪行為などネガティヴな情報が絶えず、実態としては「敬して遠ざけられる」存在になってしまっている。ロシアでは今もって徴兵制度が実施されていて、年間三〇万人もの一年間の徴集兵が入営している（ことになっている）が、国防省が多角的な愛国心育成キャンペーンに乗り出した二〇〇〇年代初頭には徴兵逃れが横行し、一時期徴兵忌避率が九〇％にも達したとの証言もあるほどだ。そのため、ロシア連邦軍当局からすれば、若者の愛国心を育成するということは、ただ単におのれの存在意義を確認し正当化するというイデオロギー的欲求を満たすばかりでなく、必要な人員を確保するという切迫した課題を満たすという意味あいを多分に含んでいるのである。装備のハイテク化によってソ連時代ほどの膨大な人員（五〇〇万人超の人員を抱えていた）を確保する必要はなくなっているものの、それでもアメリカの軍事的脅威に対抗して現在の軍事的水準を維持するにはそれなりの頭数の人材はぜひとも欠かせない。愛国心はそうした現実の必要に対応するためのいわば「切り札」になっているのだ。

してみれば、ロシア中央軍事博物館に示されたような軍事史のパースペクティヴがロシア国家とって欠かすことのできないモメントになっている理由もまた明らかであろう。あまりに膨大な国土を擁する多民族国家ロシアにあっては、国民を結びつけるナショナルな紐帯を特定の文化や宗教にではなく過去の共通の記憶、それも協働して国家を守り抜いたという戦争の記憶に求めざるをえなかった。そのため、歴史＝戦史を規範化することによって愛国心を構成する必要が生じ、大祖国戦争の記憶を「われわれ」の神聖不可侵な「物語」として組織化し神話化することが不可欠とされたのである。こうして歴史をイデオロギー化して国民統合をはかろうとするロシア流のやり方は、国家の求心力を維持するうえではたしかに一定程度は有効であるとい

うべきであろうが、そこにはいうまでもなくある種の危うさがはらまれている。軍や戦争を無条件に賛美するかのごときは軍国主義的なエートスを無批判に助長することにつながりかねないし、何より一定の政治的見解にしたがって権力が歴史的過去を押し付けるかのような方法では歴史をめぐる自由な議論が成り立つ余地などまったくなくなってしまう。そして、これはロシア国内にも根強い批判があるが、権力による歴史の政治的利用は、結局のところ、国家よりもむしろ時の政権を維持するための方便になってしまいかねないのである。

いずれにせよ、現代のロシアはこうした歴史＝戦史をめぐる問題の上に立っている。このような問題に今後どのような態度をみせるかによって「われわれ」の「物語」は新たな展開をみせることになるであろう。ロシア中央軍事博物館はそうした問題を考えるための材料を提供する場にもなっているのだ。

参考文献

廣岡正久『ロシア・ナショナリズムの政治文化――「双頭の鷲」とイコン』、創文社、二〇〇〇年。
塩川伸明『民族と言語　多民族国家ソ連の興亡１』、岩波書店、二〇〇四年。
――『国家の構築と解体　多民族国家ソ連の興亡Ⅱ』、岩波書店、二〇〇七年。
――『ロシアの連邦制と民族問題　多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』、岩波書店、二〇〇七年。
西山美久『ロシアの愛国主義　プーチンが進める国民統合』、法政大学出版局、二〇一八年。
小泉悠『徹底抗戦都市モスクワ』、ホビージャパン、二〇一八年。
――『「帝国」ロシアの地政学　「勢力圏」で読むユーラシア戦略』、東京堂出版、二〇一九年。
――『現代ロシアの軍事戦略』、ちくま新書、二〇二一年。
Thilo Jörg Gehrke, *Die Reform der russischen Streitkräfte im Kontext sicherheits-und wirtschaftspolitischer Vorgaben,* GRIN Verlag, 2008.
Dmitri Trenin, *Post-Imperium: A Eurasian Story*, Carnegie Endowment for International Peace Washington, 2011.
Roy Allison, Russia, *The West, & Military Imtervention*, Oxford University Press, 2013.
Lauri Mällkoo, *Russian Approaches to International Law*, Oxford University Press, 2015.
Roger E. Kanet, *Russia and Global Governance: The Challenge to the existing Liberal Order,* Macmillan, 2017.
F. Jacob, K. Pearl (edit), *War and Memorials*, Ferdinand Schoningh Wilhelm Fink &, 2019.